

印欧語の合成語における母音交替について

児玉 茂昭

1 本論文の目的

印欧祖語の名詞の母音交替の問題については、近年、Eichner や Schindler らの印欧語学者によって多くの成果がもたらされた¹。彼らによって明らかにされたのは、祖語の段階に存在したと考えられる名詞の母音交替のいくつかのパターンである。

本論文では、彼らの解明した名詞の母音交替のタイプをもとに、印欧祖語の段階において、名詞から合成語が派生される場合に生じたと考えられる母音交替のタイプの変化を明らかにする。

第2章では、Eichner らによって再建された印欧祖語の母音交替について概観する。第3章では、第2章での議論をもとにして、合成語派生の際に生じていると思われる母音交替のタイプの変化について論じる。第4章では、まとめと今後の展望を述べる。

2 名詞の母音交替のタイプについて

本章では、まず、母音交替という現象について概説し、その後、Eichner らによって再建された、印欧祖語の段階での名詞の母音交替のタイプについて述べる。

2.1 母音交替

以下のギリシア語の動詞の活用形では、語根の母音の音色が、各時制で $\epsilon\iota \sim \omicron\iota \sim \iota$ に変化している。

1.sg.pres.ind.act.	λείπ-ω	"I leave"
1.sg.pf.ind.act.	λέ-λοιπ-α	
1.sg.aor.ind.act.	ἔ-λιπ-ον	

動詞については、多くの分派言語に、このような母音の音色の交替がみられる。たとえば、サンスクリットでは、

3.sg.pres.ind.act.	bí-bhar-ti	"he carries"
3.sg.pf.ind.act.	ba-bhâr-a	
p.part.m.nom.sg.	bhṛ-táḥ	

¹Eichner (1972), Schindler (1975a, 1975b)。

この例では、現在時制の語根の母音は *e²、完了時制の語根の母音は *o³、完了分詞の語根母音は * $\emptyset$ であったと考えられる。このように、母音の音色を変えたり、長さを変えたり⁴することによって機能的な差異を生み出す現象を母音交替と呼ぶ⁵。

上述の例からもわかるように、印欧祖語の母音組織は、ギリシア語に最もよく保存されている。以下でも、ギリシア語は、祖語の母音を決定する際に、もっとも重要な資料として用いられる。

母音交替は、動詞や名詞の語根、接辞、語尾で見られ、上述したように、各分派言語にも、その痕跡が残されている。動詞の母音交替は、上に示したように、各分派言語に比較的好く保存されているため、再建も容易である。名詞の母音交替を再建する方法については、2.2 節で述べる。

2.2 再建の方法

次のギリシア語の例、

nom.sg. πατήρ “father”
gen.sg. πατρός

では、接辞は、強語幹⁶では -tēr という形式で、弱語幹⁷では -tr という形式であらわれている。これと同じ交替が、ラテン語やサンスクリットにもみられる⁸。

Lat. nom.sg. pater gen.sg. patris
Skt. nom.sg. pitā gen.sg. pitúr⁹

この “father” を意味する語の場合には、単一の分派言語の内部で祖形を再建することが可能である。しかし、単一の分派言語の内部で母音交替の再建を行えない場合には、複数の分派言語を比較して、再建を行う必要がある。たとえば、次の例、

Lat. nom.sg. pēs gen.sg. pedis “foot”
Gr. (Dor.) nom.sg. πώς gen.sg. ποδός
Skt. nom.sg. pāt gen.sg. padás

では、語幹の母音は、ラテン語では e、ギリシア語では o である。これらの形式が、祖語の母音を忠実に反映していると考えれば、祖語の段階には、*pod- と *ped- という 2 つの異なった語幹が存在していたことになる¹⁰。

²ギリシア語の重複現在, δίδωμι < *di-déh₃-mi, Dor. ἰσάμι < *si-stéh₂-mi, などを参照。

³Brugmann's law (IE *o → Skt. ā / ____ .R) が適用された結果, サンスクリットにおいては ā であらわれる。

⁴このような例は以下にあらわれる。

⁵母音は、上述のギリシア語やサンスクリットの例にみられるように、e~o~ $\emptyset$ という交替を示す。i や r などの sonorant も考慮に入れるなら、eR~oR~ $\emptyset$ 。

⁶単数・双数・複数の主格と、単数・双数の対格、及び単数所格の語幹。

⁷注 6 に示した形式以外で用いられる語幹。

⁸強語幹の代表として単数主格、弱語幹の代表として単数属格を挙げる。

⁹Skt. pitúr は、*ph₂t₁s から。

¹⁰サンスクリットの形式が、*pod-, *ped- のどちらに由来しているかを決定することはできない。

この再建を受け入れると、“foot”という基本的な語彙に対して、*pod-と*ped-という2つの形式が別々に祖語に存在していたことになる。このような仮説は受け入れがたい。しかし、その仮説を否定する場合には、この母音の音色の違いに対して、別の説明を与えなければならない。

この母音の音色の違いについては、祖語の段階では、屈折範疇において、強語幹と弱語幹の区別を *e と *o との質的な母音交替¹¹によって行っていた、という解釈を行うこともできる。この解釈の優れている点は、祖語に、2つの異なった祖形を再建する必要がないことである。つまり、このように解釈すれば、ラテン語は、*e を持つ語幹を類推によって屈折範疇全般に一般化し、ギリシア語は、*o を持つ語幹を一般化したと、この2つの言語にみられる語根の母音の音色の違いを説明できる¹²。

このように、複数の分派言語から導かれる祖形を用いることによって、祖語の段階での名詞の母音交替の再建を行うことも可能である。

以上で一例を示したように、祖語の段階での名詞の母音交替を再建するために、

1. 1つの分派言語内での内的再建
2. 複数の分派言語を用いた比較方法による再建

という2つの手段を用いることができる。さらに、これらの方法によっては母音交替の再建が困難である場合には、

- i 上の2つの手段に基づいて確立された母音交替との比較による再建
- ii 印欧祖語の動詞・名詞のアクセントと母音交替との間に存在すると考えられる一般的な原理に基づく再建

という方法を用いる。

2.3 印欧語に再建される名詞の母音交替

印欧祖語の名詞は、語根・接辞・語尾が量的な母音交替を行う名詞と、量的な母音交替を行わない名詞とに大きく二分される。母音交替を行わない名詞は、接辞の末尾に幹母音 (thematic vowel) と呼ばれる母音 *e/o を持ち、thematic noun と呼ばれる¹³。母音交替を

¹¹質的な母音交替とは母音の音色の変化を、量的な母音交替とは母音の長短の変化をいう。

¹²このように、祖語の段階で、*e ~ *o という母音交替によって、強語幹と弱語幹を区別していたと考えられる語は、他にも存在する。たとえば、

Lat.	nom.sg.	genu	gen.sg.	genūs	“knee”
Gr. (Epic)	nom.sg.	γόνυ	gen.sg.	γούνοϝ	
Skt.	nom.sg.	jānu	gen.sg.	jños	

サンスクリットの単数主格の形式は、語幹の母音に *o を持つ形式に遡ると考えられる (Brugmann's law)。

¹³ラテン語、ギリシア語の o 語幹男性・中性名詞が、この thematic noun である。

行う名詞は幹母音を持たず、athematic noun と呼ばれる。athematic noun は、語根に直接格語尾が付加される語根名詞と、*e/o で終わらない接辞を持ち、接辞の後ろに格語尾が付加される名詞に分類される。これを図示すると、次のようになる。

athematic noun 語根名詞
接辞を持つ名詞
thematic noun

athematic noun は、強語幹と弱語幹¹⁴とを区別する¹⁵。強語幹と弱語幹は母音交替によって特徴付けられる。

次のサンスクリットの例は、強語幹と弱語幹とが明瞭にあらわれている例である。

強語幹	:	acc.sg.	pánthām	“path”	< *péntoh ₂ -m
弱語幹	:	gen.sg.	pathás		< *pñth ₂ -és
強語幹	:	acc.sg.	rājānam	“king”	
弱語幹	:	gen.sg.	rājñas		

これらの例では、接辞の母音階梯が、強語幹と弱語幹とで異なっている。その違いは、母音交替が原因であると考えられる。

同じ現象は、ギリシア語やラテン語などの他の分派言語にも見られ、言語間で規則的な対応を示している場合がある。また、その対応は、いくつかのパターンに分類することができる。そのパターンについて、以下でみていく。

2.4 語根名詞の母音交替

まず、次の例について考えてみる。

Skt.	nom.sg.	dyaús	gen.sg.	divás	“sky”
Gr.	nom.sg.	Ζεύς	gen.sg.	Διός	

このギリシア語とサンスクリットの例を比較すると、どちらの例でもアクセントは強語幹では語根に、弱語幹では語尾に落ちていること、及び強語幹と弱語幹との間で語根に母音交替が生じていること¹⁶がわかる。これらの形式からは、次のような再建形が得られる。

nom.sg. (強語幹)	*diéu-s
gen.sg. (弱語幹)	*diu-és

¹⁴前掲の注 6 を参照のこと。

¹⁵語根名詞では語根=語幹であり、接辞を持つ名詞では語根+接辞=語幹である。

¹⁶Skt. dyau- ~ div-。ギリシア語では、母音間で *u が消失しているためわかりにくくなっているが、サンスクリットと同様の交替がみられる。

サンスクリットの長い ā は、おそらく類推によって生じたと考えられる¹⁷。また、属格の語尾については、サンスクリットのデータからは、*-os, *-es, *-as の3通りの再建が可能である¹⁸。また、ギリシア語のデータは、祖語に再建されるべき語尾が *-os であることを示唆する。

しかし、ラテン語の対応する形式 Jovis では、語尾の -is は *-es に由来している。また、ラテン語の子音幹名詞の語尾 -is も *-es に由来する。さらに、祖語の段階では、アクセントの落ちる母音の音色は、一般に *e であることを考慮して、属格の語尾には *-és を再建する。これに対し、ギリシア語では、属格の語尾は *-os によって一般化された。このタイプの名詞の強語幹と弱語幹の対立を、アクセントと母音の音色に注目して図示すると次のようになる。

$$\begin{aligned} S &: R(\acute{e}) - E(\emptyset) \\ W &: R(\emptyset) - E(\acute{e}) \end{aligned}$$

次に以下の例を考えてみる。

Lat.	nom.sg.	pēs	gen.sg.	pedis	“foot”
Gr. (Dor.)	nom.sg.	πῶς ¹⁹	gen.sg.	ποδός	
Skt.	nom.sg.	pāt	gen.sg.	padás	

ラテン語の形式からは、語根の母音に *e が、ギリシア語の形式からは、語根の母音に *o が再建される。祖語に再建される *pod- と *ped- という2つの異なった形式に対しては、2.2 節で、2つの形式が祖語の段階では同じ語の強語幹と弱語幹であり、各分派言語は、どちらから一方の語幹を類推により一般化したという解釈を示した。

次の問題は、*pod- と *ped- のどちらが強語幹であるかということであるが、これについては、ヒッタイト語の “water” をあらわす名詞が、再建の手がかりとなる。

ヒッタイト語の “water” をあらわす名詞は、次のように綴られており、祖形は以下のように再建される。

nom.sg.	wa-a-tar	<*uód-r
gen.sg.	ú-i-te-na-as	<*uéd-n̥-s

ヒッタイト語の単数主格の綴りには、scripto plena²⁰があるため、語根にアクセントがあったと考えられる。これに対して、属格の語根の位置にあらわれている i は、アクセントのない *e に由来する²¹。しかし、本来はアクセントは単数主格の場合と同様に、語根の位置にあったと考えられている²²。この名詞は、語根名詞ではなく、接辞を持つ名詞 (r/n

¹⁷単数主格に長母音を持っている語根名詞からの類推であると考えられる。たとえば, dhī “thought”, bhū “earth”。

¹⁸IE *e, *a, *o → I-Ir. *a。

¹⁹アッティカ方言では πούς。

²⁰wa-a-tar にみられる, wa-a のように、重ね書きされた母音字。この位置にアクセントがあったと考えられる。

²¹Melchert (1994 : 101)。

²²ヒッタイト語の形式は、二次的にアクセントが接辞に移動した *uédén- という形式に由来すると説明することができる (Schindler 1975 : 5)。

異語幹名詞)であるが、上に示したように、強語幹では語根にアクセントのある *o を、弱語幹ではアクセントのある *e を持っている。これと平行的に考えるならば、*pod- が強語幹であり、*ped- が弱語幹であった、と考えることができる。

ここまでの議論に従って、“foot”を意味する名詞の祖形を、次のように再建する。

nom.sg. (強語幹) *pód-s
gen.sg. (弱語幹) *péd-s

この“foot”を意味する語の例からは、次のような模式化が可能である。

S : R(ó) - E(∅)
W : R(é) - E(∅)

上に挙げた例では、すべての言語で、属格語尾には母音が存在している²³が、これについては、語幹の強弱によってアクセントの移動が起こる語根名詞²⁴に影響されて二次的に生じた、と考えることができる。

2.5 接辞を持つ名詞の母音交替

次に、接辞を持つ名詞の母音交替について考える。前節でもある程度示唆されていたことであるが、原則的に、祖語の初期の段階では、アクセントの落ちる要素には母音 *e があらわれ、アクセントの落ちない要素には、*∅ または *o があらわれる²⁵。

接辞を持つ名詞の母音交替は、強語幹と弱語幹のアクセントの落ちる位置によって、いくつかのタイプに分けられている。それぞれのタイプには、強語幹と弱語幹で、語根・接辞・語尾のうちのどの要素にアクセントが落ちるか、ということをもとにした名称が付けられている。以下では、まずその名称²⁶を挙げ、そのタイプがどのような母音交替のパターンを見せるかを記述する²⁷。

²³ 既述の Lat. *pedis*, Gr. *ποδός* を参照のこと。

²⁴ たとえば、前出の、単数主格(強語幹) *djéu-s, 単数属格(弱語幹) *diu-és。

²⁵ Rix (1976 : 122), Sihler (1995 : 129)。

²⁶ この名称はいまだ統一されていないが、ここではもっとも一般的に用いられている名称を用いる。

²⁷ 印欧祖語にこのような母音交替のタイプがいくつか存在し、それがどのようなものであったかということは、いまだに論議の対象となっている (Eichner 1972, Beekes 1985)。本来ならば、まずその問題が解決されなければならないのだが、ここでは、各分派言語に残された形式から考えて、確実に存在していたと思われるもののみを考える。

2.5.1 acrostatic

まず、前述のヒッタイト語の“water”をあらわす名詞について考えてみる。ヒッタイト語の形式とその再建形は、次のようなものであった。

nom.sg.	wa-a-tar	<*uód-r-∅
gen.sg.	ú-i-te-na-as	<*uéd-n-s

これは、語根名詞 *pod- / *ped-と同様に、語幹の強弱にかかわらず、アクセントが語根に固定されている。この祖形にあらわれている母音交替のパターンは、次のようにあらわすことができる。

$$\begin{aligned} S &: R(\acute{o}) - S(\emptyset) - E(\emptyset) \\ W &: R(\acute{e}) - S(\emptyset) - E(\emptyset) \end{aligned}$$

このような語幹の強弱に関わりなくアクセントが語根に固定されている名詞には、上述のものとは別の母音交替を行っていたと考えられるものがある。“liver”を意味する名詞は、各分派言語で次のような曲用を行う。

Gr.	nom.sg.	ἥπαρ	“liver”
	gen.sg.	ἥπατος	
Skt.	nom.sg.	yákṛt	
	gen.sg.	yáknaḥ	

サンスクリットの例でも、ギリシア語の例でも、アクセントは、語幹の強弱にかかわらず語根に落ちている。このことから考えると、祖語の段階でも、上述の“foot”の例と同じく、アクセントは語根に固定されていたと思われる。

語根の母音については、ギリシア語からは、長い *ē, サンスクリットからは、短い *e²⁸を再建することができる。

これら2つの言語以外の対応する形式をみると、アヴェスタ語では、主格は, yākarə である。この形式は、語根母音に長い *ē を持つ形式に由来する。一方、注 28 に示したように、ラテン語の形式は、語根母音に短い *e を持つ形式に由来する。

このように、長い *ē と短い *e の両方が、祖形には再建されうる。しかし、2.3 節で *pod- / *ped- について考えた時のように、それら2つの形式が、別々に祖語の段階に存在していたとは考えにくいので、どちらか一方を強語幹、もう一方を弱語幹と考える。この場合にも、長い母音を持つ語幹と短い母音を持つ語幹のどちらが強語幹であるか、という問題が生じる。この問題は、上に挙げた形式を比較することでは解決できないし、内的再建によって解決することもできない。そのため、この例以外で、強語幹と弱語幹の間に *é~é という母音交替を示すような例を見つけ出す必要がある。強語幹と弱語幹で *é~é という交替を示す例は、サンスクリットの stu- “praise” という動詞の活用形式の中にあらわれる (Mayrhofer 1986 : 173)。

²⁸ラテン語の iecur “liver” という形式は、*e に由来する母音を第1音節に持っている。これを考慮すると、サンスクリットの形式に対しては、*e を再建できる。

サンスクリットの動詞活用には、強語幹と弱語幹の区別をする athematic な活用があり、直説法現在形能動態単数には強語幹が、中動態には弱語幹があらわれる。語根 *stu-* “praise” も athematic な活用を行う場合には、強語幹と弱語幹の区別がある。下の例を参照のこと。

3.sg.pres.ind.act. *stáuti*
3.sg.pres.ind.mid. *stáve*²⁹

これに対して、強語幹には **stéu-*、弱語幹には **stéu-* を再建できる。

3.sg.pres.ind.act. **stéuti*
3.sg.pres.ind.mid. **stéuoi*

これと、上の “liver” を意味する語の母音交替が平行的であると考え、 $\hat{\eta}\pi\alpha\sigma$ の再建形には、強語幹に母音 **é* を、弱語幹に母音 **e* を再建するのが妥当である。従って、再建形は次のようになる。

nom.sg. **iek^h-r-Ø*
gen.sg. **iek^h-n-s*

各分派言語は、前述の **pod-* / **ped-* の場合のように、強語幹と弱語幹のうちのどちらか一方を、類推によって一般化した。この強語幹と弱語幹の交替のパターンは、次のようにあらわすことができる。

S : *R(é) - S(Ø) - E(Ø)*
W : *R(é) - S(Ø) - E(Ø)*

2.5.2 proterokinetic

次のヒッタイト語の例について考える (Schindler 1975 : 10)。

nom.sg. *pa-aḥ-ḥur* “fire”
gen.sg. *pa-aḥ-ḥu-e-na-as*

属格の -e- は、祖語のアクセントを持つ **é* に遡る。また主格の -ur は祖語の **-ur* に遡るから、祖形は、次のように再建できる。

nom.sg. **péh₂-ur*
gen.sg. **ph₂-uén-s*

上の再建形にみられるように、このパターンでは、強語幹で語根に、弱語幹では接辞に、アクセントのある **e* があらわれる。したがって、この祖形にあらわれている母音交替のパターンは、次のようにあらわすことができる。

S : *R(é) - S(Ø) - E(Ø)*
W : *R(Ø) - S(é) - E(Ø)*

²⁹ 古い形式と考えられ、より新しい *stávate* という形式も存在している。

2.5.3 amphikinetic

次に、サンスクリットの“bridge”を意味する名詞と、それに対応するアヴェスタ語の形式について考えてみることにする。

Skt.	acc.sg.	pánthām	gen.sg.	pathás
Av.	acc.sg.	pañtam	gen.sg.	paθō

サンスクリットのデータを根拠として、祖語の段階でもアクセントの位置は、強語幹では語根に、弱語幹では語尾にあったと考える。

また、アヴェスタ語の属格にみられる θ は、 $*t^h < *th_2$ に遡る。一方、対格では、属格で θ があらわれる位置に t があらわれているので、対格では、 $*t$ と $*h_2$ との間に母音が存在していた、と考えられる。

上のデータからだけでは、強語幹の語根、接辞の母音を決定することはできない³⁰が、祖語の段階では、一般にアクセントのある部分に $*e$ があらわれることを考慮して、強語幹の語根には $*e$ を、アクセントのない接辞には $*o$ を再建する。また、同じ理由から、属格の語尾には、母音 $*e$ を再建する。

再建形は次のようになる。

acc.sg.	$*pént-oh_2-m^{31}$
gen.sg.	$*pnt-h_2-és$

アヴェスタ語の形式は、この祖形を忠実に反映している。サンスクリットでは、強語幹にも th 音があらわれているが、これは、弱語幹からの類推の結果である、と説明することができる。この再建された祖形にあらわれている母音交替のパターンは、次のようにあらわせる。

S	: R(é) - S(o) - E(θ)
W	: R(θ) - S(θ) - E(é)

2.5.4 hystero-kinetic

最後に、以下の例について考えてみる。

Gr.	nom.sg.	πατήρ	“father”
	gen.sg.	πατρός	
Lat.	nom.sg.	pater	
	gen.sg.	patris	
Skt.	nom.sg.	pitá	
	gen.sg.	pitúr	

³⁰I-Ir. $a < *e, *o, *a$ であるので。

³¹RV に、pánthaam と読むべき例が、数例存在する。

ギリシア語とラテン語のデータからは、以下のような祖形が再建できる。アクセントの位置は、ギリシア語の例に従っている。

$$\begin{array}{ll} \text{nom.sg.} & *ph_2-t\acute{e}r \\ \text{gen.sg.} & *ph_2-tr-és \end{array}$$

ギリシア語では、属格の語尾が -os に一般化されているため、祖語の属格語尾 *-és は -os であらわれている。サンスクリットの単数属格は、語尾の母音が * $\emptyset$ である形式から導かれる³²。

このような母音交替のタイプは、次のようにあらわすことができる。

$$\begin{array}{l} S : R(\emptyset) - S(\acute{e}) - E(\emptyset) \\ W : R(\emptyset) - S(\emptyset) - E(\acute{e}) \end{array}$$

2.6 まとめ

ここまでで挙げた母音交替のタイプについてまとめておく。

1. 語根名詞

i)

$$\begin{array}{l} S : R(\acute{o}) - E(\emptyset) \\ W : R(\acute{e}) - E(\emptyset) \end{array}$$

このタイプでは、acrostatic type の名詞と同様に、アクセントは、強語幹でも、弱語幹でも、語根に固定されている。

ii)

$$\begin{array}{l} S : R(\acute{e}) - E(\emptyset) \\ W : R(\emptyset) - E(\acute{e}) \end{array}$$

このタイプでは、アクセントは語根と語尾の間で移動する。

2. 接辞を持つ名詞

i) acrostatic

$$\begin{array}{l} S : R(\acute{e}) - S(\emptyset) - E(\emptyset) \\ W : R(\acute{e}) - S(\emptyset) - E(\emptyset) \end{array}$$

$$\begin{array}{l} S : R(\acute{o}) - S(\emptyset) - E(\emptyset) \\ W : R(\acute{e}) - S(\emptyset) - E(\emptyset) \end{array}$$

ii) proterokinetic

³²つまり、*ph₂tr-s。Skt. で、ur<*_{ts} 同様の発達が、Skt. の pf.act.3.pl. の語尾にもみられる。

$$\begin{aligned} S &: R(\acute{e}) - S(\emptyset) - E(\emptyset) \\ W &: R(\emptyset) - S(\acute{e}) - E(\emptyset) \end{aligned}$$

iii) amphikinetic

$$\begin{aligned} S &: R(\acute{e}) - S(o) - E(\emptyset) \\ W &: R(\emptyset) - S(\emptyset) - E(\acute{e}) \end{aligned}$$

強語幹の接辞に母音 *o があらわれるのは, amphikinetic タイプのみである。

iv) hysterokinetic

$$\begin{aligned} S &: R(\emptyset) - S(\acute{e}) - E(\emptyset) \\ W &: R(\emptyset) - S(\emptyset) - E(\acute{e}) \end{aligned}$$

3 考察

第1章で述べたように、以下では、第2章の内容をふまえて、語派生の際に生じたと考えられる母音交替のタイプの変化について考察していく。考察の対象になるのは、次のような現象である。

ギリシア語には、以下のような、名詞を後分とする合成語が存在している。

$$\begin{array}{llll} \gamma\acute{\nu}\omega\mu\alpha & \text{"mark, judgement"} & : & \epsilon\delta\gamma\acute{\nu}\omega\mu\omega\nu & \text{"sensible"} \\ \acute{\epsilon}\pi\omicron\varsigma & \text{"word"} & : & \epsilon\delta\epsilon\pi\acute{\eta}\varsigma & \text{"well-speaking"} \end{array}$$

右側の語は合成語であり、左側の語が、その後部の要素となっている。

これらの合成語 $\epsilon\delta\epsilon\pi\acute{\eta}\varsigma$, $\epsilon\delta\gamma\acute{\nu}\omega\mu\omega\nu$ に共通する特徴として、アクセントが、合成語のもとになった名詞³³のアクセントの位置から移動していること、合成語が形容詞となっていることが挙げられる³⁴。合成語の元になった語である $\gamma\acute{\nu}\omega\mu\alpha$, $\acute{\epsilon}\pi\omicron\varsigma$ は名詞であるので、これらの合成語では、元になった名詞から形容詞への品詞の転換が生じていることになる。

さらにこれらの合成語には、1つの目立った特徴がある。それは語末母音の音色の変化であり、たとえば、 $\acute{\epsilon}\pi\omicron\varsigma$ の語末の母音 o に対して、 $\epsilon\delta\epsilon\pi\acute{\eta}\varsigma$ の語末の母音 $\acute{e}$ という変化がみられる。 $\gamma\acute{\nu}\omega\mu\alpha$ と $\epsilon\delta\gamma\acute{\nu}\omega\mu\omega\nu$ の例にも、母音の音色の変化がみられる。

こうした特徴について、これまでの文法書には、次のような記述がある。

アクセントの移動については、(Smyth 1920: 41) に

In composition the accent is usually recessive in the case of substantives and adjectives, regularly in the case of verbs.

という記述があるが、これは $\acute{\epsilon}\pi\omicron\varsigma$ と $\epsilon\delta\epsilon\pi\acute{\eta}\varsigma$ の例にはあてはまらない。また、アクセントの移動の理由についても、明らかにされていない。

また、語末の母音の音色の変化については (Smyth 1920: 250) に

³³すなわち、表の左側の語。

³⁴これらの合成語が、形容詞として使用されていることは、修飾する名詞の性・数・格と一致して曲用することからわかる。

A noun forming the last part of a compound often changes its final syllable.

という記述があるが、音色の変化の理由についての記述はみられない³⁵。

前述した母音の音色の変化やアクセントの移動という現象は、上に挙げた2つの例に限られたことではなく、ギリシア語内に、ほかにも多くの例を発見することができる。たとえば、

κτῆμα “possession, property” : ἀκτῆμων “without property”
ἀνὴρ “man, husband” : δυσήνωρ “having a bad husband”

これらの例でも、合成語の語幹の母音の音色の変化³⁶がみられる。

上に挙げた現象は、ギリシア語に限られた現象ではなく、印欧語の他の分派言語にもみられる。たとえば、次のサンスクリットの例³⁷,

jánman “birth, child” : dvijánman “having two births”

このサンスクリットの例には、母音の音色の違いがあらわれていない。また、アクセントの移動もみられない。しかし、この例について、両者の語幹末の母音の音色が、祖語の段階では互いに異なっていたと推論しうる根拠がある。

jánman と dvijánman の対格³⁸は、それぞれ次のような形式である。

jánman jánma RV 1, 60
dvijánman dvijánmānam RV 10, 549

対格の場合、語末の母音はそれぞれ、前者が a、後者が ā である。ā は祖語の *o に遡ると考えることができる³⁹。また、前者の短い a は祖語の *_h に遡る⁴⁰。

このように、音変化によってわかりにくくなっているが、サンスクリットにも、ギリシア語にみられる現象に対応する現象の痕跡が残されていると考えてもよい。この対応が存在している原因としては、すでに祖語の段階で、上でみてきた現象が存在していたと考えるのが妥当である。

以下では、これまでに示した現象が、祖語の段階で行われていた語派生に伴う母音交替のタイプの変化に起因することを、示していきたい。本節で述べた現象がみられる名詞の接辞は限られているので⁴¹、その接辞を挙げて考察を行うことにする。

³⁵Schwyzler (1939) にも、アクセントの移動や音色の変化についての記述はあるが、理由についての説明はない。

³⁶ἀκτῆμων では、 $\emptyset \rightarrow o$ 、δυσήνωρ では、 $e \rightarrow o$ 。

³⁷これらの例も athematic noun からの派生である。

³⁸ここで対格を比較の対象に用いたのは、語幹末の母音の音色の違いが明確に説明できるためである。dvijánman の主格は、dvijánmā である。

³⁹Brugmann's Law の出力。ただし、*o 以外の長母音、*ē, *ō, *ā から変化した可能性もある。しかし、ギリシア語の対応する接辞の形式 -μωνα < *-monn を考慮すると、その可能性は低い。

⁴⁰この a が祖語の _h に遡ることは、他の分派言語との比較によって決定できる。たとえば、

εἶμα “clothing” < *_hés-m_h。

⁴¹語末母音の音色の変化が生じるのは、athematic noun から派生した合成語である。逆に、thematic noun から派生した合成語には、母音の音色の変化は見られない。

ἵππος “horse” : εὐίππος “having good horses”

3.1 *-ter, *-tor

*-ter, *-tor は、動詞語根から行為者名詞を形成するのに使われる接辞であり⁴²，また，親族名称を表す名詞を形成するのにも用いられている⁴³。

Gr.	πατήρ	“father”	Lat.	pater	Skt.	pitā́
Gr.	μήτηρ	“mother”	Lat.	mater	Skt.	mātā́
Gr.	δοτήρ	“giver”			Skt.	dātā́
Gr.	γενέτωρ	“begetter”			Skt.	jānitā́

接辞 *-ter を持つ名詞には、2.5.4 節で示したように、hysterokinetic タイプの母音交替を行うものがあったと考えられる。

一方、接辞 *-tor を持つ名詞は、ギリシア語で次のような屈折を行う。

Gr.	nom.sg.	γενέτωρ	“begetter”
	gen.sg.	γενέτορος	

強語幹・弱語幹の接尾辞は、ともに母音 o で特徴付けられている。これは、2.6 節に述べたように、amphikinetic タイプのみにみられる特徴である。従って、γενέτωρ は、以下のような再建形を持っていたと考えることができる。

nom.sg.	*ǵénh ₁ tor	(Skt. jānitā́)
gen.sg.	*ǵnh ₁ trés	

このように、祖語の段階では、*-ter を接辞として持つ名詞は hysterokinetic タイプの、*-tor を接辞として持つ名詞は amphikinetic タイプの屈折をそれぞれ行っていたと考えることができる。

ギリシア語では、*-ter を接辞として持つ名詞と、その名詞から形成された所有合成語 (bahuvrīhi) では、次のような接辞の母音の音色の違いがみられる。

⁴² *-ter が語根に付加された名詞と、同じ語根が *-tor の付加を受けて形成された名詞の対がギリシア語には多数存在している。一例を挙げるならば、

Gr.	nom.sg.	δοτήρ	“giver”
Gr.	nom.sg.	δώτωρ	“giver”

他にも ἡγή-τήρ : ἡγή-τωρ, βοτήρ : βώτωρ, ἀκιστήρ : ἀκίστωρ など。

Benveniste は、その著書 (Benveniste 1948: 45ff.) で、同一の動詞語根から接辞 *-ter によって形成された名詞と、*-tor によって形成された名詞との間には、意味的な違いが存在すると述べている。しかし、このような対が、すべての語根についてみられるわけではない。

⁴³ 親族名称には本来行為者名詞であったと考えられる名詞が含まれている。

Gr.	θυγάτηρ	“daughter”
Skt.	duhitā́	
IE	*dhugh ₂ -tér	*dheugh ₂ “to milk”

πατήρ	“father”	ἀπᾶτωρ	“without father”
μήτηρ	“mother”	ἀμήτωρ	“without mother”

所有合成語では、接辞の母音の音色は、o で特徴付けられており、これは、amphikinetic タイプの母音交替を示している。このことから考えて、ἀπᾶτωρ の祖形は、次のように再建することが可能である。

nom.sg.	* η -péh ₂ tor
gen.sg.	* η -ph ₂ trés

これらの例は、*-ter, *-tor の対では、左側の名詞をもとにして合成語を形成する時に、母音交替のパターンが、hysterokinetic から amphikinetic に変更されていることを示している。

3.2 *-m η , *-mon

*-m η は、語根から中性名詞を形成するのに用いられる接辞である。

Gr. nom.sg.	γνώμα	“mark, judgement”
gen.sg.	γνώματος	
Skt. nom.sg.	mánma	“thought”
gen.sg.	mánmanas	

上の例では、単数主格のアクセントは語頭音節にある。このことから考えて、*-m η によって形成される名詞は、強語幹で、語根にアクセントがあったと考えられる。従って、これらの語に対しては、次のように再建することができる。

γνώμα	<	* $\hat{\eta}$ néh ₃ -m η
mánma	<	*mén-m η

弱語幹は、Skt. gen.sg. mánmanas < *m η -mén-s⁴⁴ の場合には接辞にあり、このため、proterokinetic タイプの母音交替を行っていたと考えられる。これを以下にまとめると、

nom.sg.	mánma	<	*mén-m η
gen.sg.	mánmanas	<	*m η -mén-s

語尾と語根にみられる母音は、二次的なものであると考えることができる。ところが、この名詞を後分として持つ所有合成語については、以下のような形式がみられる。

nom.sg.	durmánmā	“having evil mind”	RV 1, 49, 7
acc.sg.	durmánmānam		RV 1, 129, 7

対格の形式にみられる接尾辞の ā は、Brugmann’s law により *o に遡るので、対格の形式に対しては、以下のような祖形を再建することができる。

⁴⁴接辞に *e を再建するのは、*o を再建すると、サンスクリットでは、Brugmann’s law により、ā であられるため。アクセントの位置は、主格からの類推であると考えられる。

*dus-ménmon-m̥

2.6 節で述べたように、強語幹で接尾辞に *o を持つ母音交替のタイプは、amphikinetic タイプ以外にはないので、この例では、所有合成語を派生する場合に、proterokinetic から amphikinetic に母音交替のタイプが移っていることがわかる。

ギリシア語では、接辞 *-m̥ によって形成された名詞は、次のような屈折を行った。

nom.sg. γνῶμα
gen.sg. γνῶματος

先述したように、単数主格には、語根にアクセントのある *ǵnéh₃-m̥ という形式を再建できる。単数属格については、サンスクリットから再建された形式を重視して、祖語の段階では、この名詞が proterokinetic type の母音交替を行っていたと考え、*ǵnh₃-mén -s という形式を再建する。ここで、*ǵnéh₃-m̥-s という形式を再建しないのは、強語幹でも弱語幹でも、語根にアクセントのある短い e を持つ母音交替のタイプを、第 2 章では、再建できなかったためである。

ギリシア語にも、この名詞を後半の要素として持つ所有合成語があり、それは、以下のような曲用を行う。

nom.sg. εὐγνώμων “of good feeling”
gen.sg. εὐγνώμονος

これ以外にも、中性名詞を後分とする所有合成語は、ギリシア語に多数存在し、εὐγνώμων と同様の曲用を行う。そうした合成語のうちのいくつかを、その要素である中性名詞とともに挙げる。

κτῆμα “possession, property” ἀκτῆμων “without property”
εἶμα “clothing” ἀνεῖμων “without clothing”

これらの語では、強語幹でも、弱語幹でも、接辞が母音 o で特徴付けられている。このことから考えると、これらの所有合成語は、祖語の段階で、先ほどみたサンスクリットの所有合成語と同様に、amphikinetic タイプの母音交替を行っていたと考えられる。

以上から、*-m̥ によって形成された中性名詞から所有合成語が派生する場合には、構成要素となった名詞の母音交替のタイプである proterokinetic から、amphikinetic type への変更が生じていることがわかる。

3.3 *-es, *-os

*-os は、語根から中性名詞を形成する時に使われる接辞である。各分派言語に、以下のような例がみられる。

Gr. nom.sg.	γένος	<*ǵénh ₁ -os	"kin"	γίγνομαι	"I beget"
Skt. nom.sg.	jánas				
Gr. nom.sg.	κλέος	<*kléu ₁ -os	"fame"	κλέω	"I praise"
Skt. nom.sg.	śrávas				

上の例からは、強語幹には、語根にアクセントのある*eを再建することができる。
弱語幹については⁴⁵,

Gr. nom.sg.	γένος
gen.sg.	γένεος
Gr. nom.sg.	μένος "force, spirit"
gen.sg.	μένεος

のように、接辞にも*eがあらわれる。*eは、基本的にアクセントのある位置にしかあらわれないから⁴⁶，弱語幹では、接辞にアクセントが移動していたと考えられる。以上から、弱語幹には、以下のような形式を再建する (Rix 1975: 144)。

γένεος	<*ǵnh ₁ -és-os
μένεος	<*mn-és-os

ギリシア語では、単数属格でも、語根の母音がe階梯であらわれているが、これは、類推によって、強語幹の語根の*eが、パラダイム全体に広がったためである、と説明することができる。以上から、*-osによって形成された中性名詞のうち、語根にe階梯の母音を持っているものは、proterokinetic typeの母音交替を行っていた、と考えられる。

この*-osによって形成された中性名詞を後分としている所有合成語が、ギリシア語には多く存在している。以下に、いくつかの例を挙げる。

εὐκλείης	"having good fame"	εὖ "good"	κλέος	"fame"
εὐγενής	"well-born"	εὖ "well"	γένος	"kin"

これらの所有合成語は、形容詞として用いられる。接辞の母音の階梯は、e階梯になっており⁴⁷，アクセントも接辞に移動している。また、これらの合成語は以下のような屈折を

⁴⁵本文中で挙げた形式は、Homeric Greekの形式である。Atticでは単数属格の形式は、母音融合を起こして、それぞれ

gen.sg.	γένους
gen.sg.	μένους

という形になっている。

⁴⁶語根のeは、二次的に生じたと考えられる。

⁴⁷中性主格は-ésである。男・女性形主格が、-ήςでマークされるのは、*-ter, *-tor, *-monなどの男・女性形主格が、延長階梯の母音でマークされるのと同じく、中性と男・女性の性の違いを、母音の長さによって区別するためである、と考えられる (Rix 1976: 163)。

*-osを接辞として持つ女性名詞は、中性名詞と異なり、延長階梯の接辞を持つ。

Homeric Greek	ἡώς	"dawn"	(Skt. uśás)
	αἰδώς	"shame"	

行う⁴⁸。次の例は εὐγενής の男・女性形の屈折である。

nom.sg.m.f. εὐγενής
gen.sg.m.f. εὐγενούς < εὐγενέσος

接辞は、強語幹および弱語幹で、ともにアクセントの落ちる e 階梯であらわれている。従って、この合成語は祖語の段階では強語幹に e 階梯の接辞を持っていたと考えることができる。2.6 節にまとめた母音交替のタイプにみられるように、強語幹の接辞が e 階梯であられるのは、hysterokinetic タイプの母音交替を行うもののみである。従って、これらの合成語は、hysterokinetic タイプの母音交替を行っていたと推測でき、次のような形式を再構することが可能である⁴⁹。

nom.sg.m.f. εὐγενής < *-ǵnh₁-és
gen.sg.m.f. εὐγενέσος < *-ǵnh₁-s-és

この場合にも、名詞から所有合成語が形成される時に、母音交替のタイプの変化が生じている。この場合にみられる母音交替のタイプの変化は、proterokinetic から hysterokinetic への変化である。

3.4 語根名詞

ここでは、これまでと異なり、語根名詞について若干の考察を行う。ギリシア語には、語根名詞から形成された合成語で、語末母音の音色が変化しているものが存在している。そうした合成語の後分となっている要素は、次の 2 語である。

Gr. nom.sg. ἀνὴρ “man” Skt. acc. sg. nāram
gen.sg. ἀνδρός
Gr. nom.sg. φρήν “midriff”
dat.pl. φρασί

これらの語からは、以下のような形式を、印欧祖語の段階に再建できる (Schindler 1972: 36)。

nom.sg. *h₂nér “man”
gen.sg. *h₂nrés
nom.sg. *ǵrén “midriff”
dat.pl. *ǵrsú

⁴⁸-ές という接辞を持つ形容詞が、すべて対応する中性名詞を持つ所有合成語であるわけではなく、後分となっている要素は、中性名詞以外の語であることもある (Schwyzer 1939: 513)。たとえば, ἀναιδής “shameless” は, αἰδώς “shame” という女性名詞から形成されたと考えられる。

⁴⁹poetic αἰδής “unseen”(Attic ἀειδής) は εἶδος “form” から形成された所有合成語であるが、この語は、proterokinetic type から hysterokinetic type への変化をよりはっきりとあらわしていると思われる。

このように、これらの語は、語根と語尾の間でアクセントの移動が生じるタイプであったことがわかる。これらの語から、次のような合成語が形成される。

ἀνήνωρ “unmanly”; φιλήνωρ, φιλόανωρ⁵⁰ “fond of a man”;
ὑπερήνωρ “overbearing”
ἄφρων “senseless”; ταλασίφρων “stout-hearted”; ὁμόφρων “agreeing, united”

ἀνήρ, φρήν の 2 語から形成されたこれらの合成語では、アクセントの位置は前に移動し、語末音節の母音の音色は e から o に変化している。この変化については、kinetic なタイプから static なタイプへの母音交替のタイプの変化があったと考えることで説明できるかもしれない⁵¹。

nom.sg. ἀνήνωρ < *nh₂nór
gen.sg. ἀνήνορος < *nh₂nérs

しかし、この 2 語については、他の分派言語との比較が困難であるため、ここで行った説明の妥当性については疑問が残る。

これとは異なる説明として、-τωρ, -μων という接辞を持つ合成語からの類推によって母音の音色を変化させたという説明の妥当性も否定できない。

πατήρ : εὖ-πάτωρ = ἀνήρ : εὖ-X
X = ἄνωρ

しかしこのような類推による説明では、ἀνήρ のような類推の対象を持たない φρήν から形成された合成語に対して説明を与えることができない。

今挙げたどちらの説明もその根拠は薄弱であり、これらの例については、さらに研究が必要であると思われる。

⁵⁰Doric.

⁵¹ἀνήρ の語頭音節の母音が合成語で長くなっているのは、ギリシア語の合成語にみられる一般的な特徴であると考えられる。ギリシア語では一般に合成語の後分が母音で始まる場合、その語頭母音は長くなる。

ὄνομα “name” → εὐώνυμος “of good name”

4 結論と今後の展望

第3章では, athematic noun を後部の要素とする所有合成語を派生させる場合に, 母音交替のタイプの変更が生じていることを, athematic noun の接辞を個別にみていくことによって明らかにした。

第3章で明らかにした母音交替のタイプの変化を, 以下にまとめる。

*-ter	: *-tor	acrostatic	→ amphikinetic
*-mn̥	: *-mon	proterokinetic	→ amphikinetic
*-os	: *-es	proterokinetic	→ hysterokinetic

このように, 所有合成語が形成される場合には, 母音交替のタイプが変化する場合があります。今回取り上げなかった接辞⁵²については, 調査した範囲ではこのような母音交替のタイプの変化がみられなかったために, 今後さらに研究を行う必要があると考えられる。

さらに今後の課題として, 合成語を形成する場合ではなくても, 母音交替のパターンが変化したと考えられる形式が分派言語に残されていることがある。

たとえば次の例は, 中性名詞とそれに対応する形容詞の例である。これらの形容詞は, 本来, 対応する名詞と“～を持った(“～”には対応する名詞の意味が入る)”という意味的關係を持っていたと思われる。

αἵμων	“bloody”	:	αἷμα	“blood”
νοήμων	“thoughtful”	:	νόημα	“perception, thought”
Skt. brāhmā	“having brahman”	:	brahman	“brahman”

これらの例では, 3.1 節で考察したのと同様に, 名詞から形容詞への派生の時に proterokinetic から amphikinetic への母音交替のタイプの変化が生じていると考えられる。

また, 次のサンスクリットの例では, 名詞とそれに対応する形容詞の間にみられるアクセントの移動が, 3.3 節で考察したのと同様に, 語派生の際に proterokinetic から hysterokinetic への母音交替のタイプの変化が生じていることを示唆している。

yáśas	“glory”	yaśás	“glorious”
ápas	“work”	apás	“active”
táras	“swiftness”	tarás	“swift”

ここで新たにしめした名詞から形容詞への派生の場合にも派生の結果である形容詞の母音交替のタイプは amphikinetic と hysterokinetic であり, 本論文で記述された範囲では, 派生の結果生じた合成語や形容詞にこの2つの母音交替のタイプが顕著にみられる⁵³。

⁵²*-on, *-i, *-u など。

⁵³母音交替のタイプの変化が生じる原因については現時点では一切明らかではない。しかしながら, 次のような現象を考察することによって説明を与えることが可能になるかもしれない。

thematic な名詞で派生が生じる時に, アクセントの移動が起こっていたことを裏付ける現象がいくつか各分派言語にある。

例を挙げると,

こうした名詞から形容詞への派生の場合にも母音交替のタイプの変化がみられることから、今後はこのような派生についても視野に入れて、より広い視点から研究を進めていく必要がある。印欧語名詞の母音交替についての問題は近年かなりの進展が見られたが、多くの面でいまだ不明な点が残されている。今後、本論文で取り上げた合成語の派生の場合にみられる例を含め、祖語の段階の母音交替を直接反映していると考えられる例を各分派言語の中に発見し、それらに合理的な説明を行っていく必要がある。

5 略号

acc.	accusative	act.	active	aor.	aorist
dat.	dative	f.	feminine	gen.	genitive
ind.	indicative	m.	masculine	mid.	middle
n.	neuter	nom.	nominative	p.	past
part.	participle	pf.	perfect	pl.	plural
sg.	singular	1.	1st person	3.	3rd person
語根	R	接辞	S	語尾	E
強語幹	S	弱語幹	W		
Av.	Avestan	Dor.	Doric	Gr.	Greek
IE	Indo-European	I-Ir.	Indo-Iranian	Lat.	Latin
RV	Rig-Vedic	Skt.	Sanskrit		

6 参考文献

略号

MSS: Münchener Studien zur Sprachwissenschaft.

BSL: Bulletin de la Société Linguistique de Paris.

Skt.	súyukta-	“well-yoked”	yuktá	“yoked”	<*iug-tó
Gr.	εὐκτητός	“honestly acquired”	κτητός	“acquired”	<*kph ₂ -tó

*-tó によって形成される動形容詞から合成語を作ると、上の例にみられるようにアクセントは接辞から前に移動する。

また、ギリシア語の θνητός “mortal” と θάνατος “death” は、前者から後者が派生する際にアクセントの移動が起こっている。

θνητός	<*d ^h nh ₂ -tó
θάνατος	<*d ^h h ₂ -to

このように、thematic な名詞でも、派生の際にはアクセントの移動が起こっている。こうした事実から考えると、第3章で取り上げた athematic な名詞の場合にも、派生の際に起こったアクセントの移動が、母音交替のタイプの変化の原因となっている可能性がある。

ただし、この問題は本論文で扱う範囲を超えており、更なる実証的な研究が必要であると考えられる。

- Bartholomae, Christian. 1904. *Altiranisches Wörterbuch*. Strassburg: Karl. J. Trübner.
- Beekes, R. S. P. 1985. *The Origins of the Indo-European Nominal Inflection*. Innsbruck: IBS.
- Buck, Carl Darling and Walter Petersen. 1970. *A Reverse Index of Greek Nouns and Adjectives*. Hildesheim: Georg Olms.
- Eichner, Heiner. 1973. "Die Etymologie von heth. mehur." *MSS* 31 : 53-107.
- Euler, Wolfram. 1979. *Indoiranisch-griechische Gemeinsamkeiten der Nominalbildung und deren indogermanische Grundlagen*. Innsbruck: IBS.
- Friedrich, Johannes. 1940. *Hethitisches Elementarbuch*. Heidelberg: Carl Winter.
- Frisk, Hjalmar. 1960. *Griechisches etymologisches Wörterbuch*. Band I. Heidelberg: Carl Winter.
- Geiger, Wilhelm and Ernst Kuhn. 1901. *Grundriss der iranischen Philologie* Band I. Strassburg: Karl J. Trübner.
- Graßmann, Hermann. 1964. *Wörterbuch zum Rig-Veda*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Mayrhofer, Manfred. 1986. *Lautlehre: Segmentale Phonologie des Indogermanischen. Indogermanische Grammatik*. Band I, 2. Heidelberg: Carl Winter.
- Pokorny, Julius. 1959. *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch*. I, II. Tübingen und Basel: Francke.
- Rasmussen, Jens Elmegård. 1989. *Studien zur Morphophonemik der indogermanischen Grundsprache*. Innsbruck: IBS.
- Rix, Helmut. 1976. *Historische Grammatik der Griechischen: Laut- und Formenlehre*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Schwyzler, Eduard. 1939. *Griechische Grammatik*. Bd. I. München: C. H. Beck'sche Verlagbuchhandlung.
- Schindler, J. 1972. "L'apophonie des noms-racines indo-européens." *BSL* 67 : 31-38.
- Schindler, J. 1975a. "L'apophonie des thèmes indo-européens en -r/n." *BSL* 70 : 1-10.
- Schindler, J. 1975b. "Zum Ablaut der neutralen s-Stämme des indogermanischen." *Flexion und Wortbildung*. hrsg. von Helmut Rix. 259-267. Wiesbaden: L. Reichert.

On the ablaut of compounds of Proto-Indo-European

Shigeaki KODAMA

Summary

A considerable number of adjectival compounds of the Indo-European language family, traditionally called bahuvrīhi or possessive compounds, show a difference between the vowels of the ultimae of them and those of the simple nouns constituting the latter parts of these compounds. This phenomenon can be observed only when the simple nouns are athematic ones, which show vowel alternation on whether the stem is strong or weak. The purpose of this paper is to examine the phenomenon on the ablaut system of PIE(Proto-Indo-European) nouns changed drastically through the recent studies.

The interpretation of the phenomenon, the examples of which are γνῶμα and εὐγνώμων, or γένος and εὐγενής, was not major concern to Smyth(1920) and Schwyzler(1939), although they made thorough description of those compounds. And Rix(1975) describes a historical grammar of Greek in light of the newly acquired knowledge on PIE, but makes no remark on the phenomenon.

In chapter two, we briefly summarize the terms classifying athematic words. These terms indicate on what part of a word the accent falls according to whether its stem is strong or weak. For example, a “hysterokinetic” word has its accent on its affix when it is in the strong form, and on its case ending when in weak form. An example of the “hysterokinetic” noun is *ph₂tér “father” / *ph₂trés “father’s”. The characteristics of the other types are:

	strong form	weak form
acrostatic	root	root
proterokinetic	root	affix
amphikinetic	root	ending
hysterokinetic	affix	ending

Note: The first column shows the term, and the second column designates on what part of a word the accent falls when the word is in the strong form. The third column designates the place of the accent of the word in the weak form.

In chapter three, we examine the phenomenon on the ground of the arguments developed in the previous chapter. The crucial point is that the phenomenon is caused by the change of the ablaut pattern of the simple noun to those of the compounds. Considering the case of γένος and εὐγενής. The former is, according to Schindler(1975), of “proterokinetic” type, and I conclude the latter to be of “hysterokinetic” type from the evidence that it has an accent on its ultima when it is in the strong form, showing difference from the original simple noun. It must also be noted that the results of the changes are different according to what type of the ablaut the simple nouns belong to. The cause of these changes is not clear, but some Sanskrit words showing difference of the meanings by the place of their accent (ex. ápas “work”, apás “active”) imply that these changes of the ablaut pattern occur with the change of the parts of speech, that is, the change from noun to adjective.